

### 第23話（14頁） キツネとノミとオオカミ

キツネがノミにかまれて苦しんでいました。ふと、ノミたいじの方法を思いつきました。川にやってくると、しっぽを先のほうから川にたらしせていきました。ノミたちはしっぽから背中にとびうつりました。キツネはうしろあしも水につけていきました。ノミたちは背中のもっと上のほうへ、くびへ、頭へととびうつりました。キツネはさらに水にふかくはいて、顔だけが見えるばかりになりました。ノミたちはみんなキツネの鼻さきに集まりました。そこで、キツネは水にもぐりました。ノミたちは岸にとびうつり、キツネはべつのところから水を出しました。オオカミがこれを見ていて、もっとうまくやろうと思いました。

オオカミはいちどに川にとびこみ、ふかくもぐって、水のなかにじっとしていました。ノミがみんな死んでしまうと思ったのです。けれども、水から出ると、ノミたちはみんな息をふきかえし、オオカミをかみはじめました。

「イソップ物語には出てこないが、あっても不思議がないようなストーリーだと思った。『ウサギとカメ』の話と、どこか似ているね。」

「ことわざなら、急がば回れ、あるいは、急いては事を仕損じる、か。」

「オオカミは、手っ取り早くノミを溺死させようと思ったところが浅はかだった。向こう見ず、力づく、がむしゃら、といった言葉が当てはまるよ。」

「オオカミは大体、頭を使っていない。考えていないし、想像力も欠けている。」

「犬や猫を飼っていたらすぐ気付くけど、ノミはつぶさないことには、いつまでも体の毛にくっついている。水をかけても死んだふりをしていて、また息を吹き返しちゃう。とてもしぶとくて、やっかいな虫だよ。」

「キツネはノミを殺してはいない。自分の体から川岸に移らせただけで、ノミも生かしている。殺生を嫌ったのか、お釈迦さまや一茶をどこかで思い出させるなあ。」

「あるいは、ノミを殺すのは大変だと重々わかっていて、ノミが水を嫌いなことに目を付け、自分の体から追い出そうとした、ということかな。」

「川岸に移ったノミは、また別の動物に巣くうはずだよ。だから、このキツネは『べつのところから水を出しました』と書かれている。」

「ノミの一群は今度は、ノミを退治し損ねたオオカミにいついたりしてね。となれば、オオカミは二倍かまれるわけだ。(笑い)」